

「いともかしこし 讃美歌 502 番」

ある女性の物語 ～讃美歌からの黙想～

Takako Nojiri



今回の「讃美の力」に取り上げられた讃美歌「いともかしこし」の学びにおいて、岡本牧師は英語の歌詞を自ら訳されて、それが「資料 1」としてあげられています。

「**I love to tell the story. 私はその物語を語るのが大好きです**」と岡本牧師が訳され、何度も繰り返される歌詞にある「物語」…それは「イエスと彼の愛について」であるとあります。岡本先生らしく優しさと暖かさに満ちた英文からの訳詞とメッセージから、今回のエッセイでは、私が体験した「イエスと彼の愛についての物語」を語りたいと思います。

それはある一人の女性に起こった奇跡の物語、ひっそりと生きたその人とイエスキリストの愛の物語は、私が伝えなければ、もしかしたら、いえ、きっと誰にも知られないままで消えてしまうかもしれません。それでもいいのかもしれない…でも私は伝えておきたい、伝えなければならない、何度でも誰にでも…そんな思いがあるのです。

出会い

私とその女性 K さんと知り合ったのは、大学を卒業して間もなく結婚してすぐでした。都下の、とある住宅街に新居を構えたのですが、その新居と同じ通りの斜め向かいに位置する二階建てのアパートの一室に、彼女は少し年下の夫と小さな娘と一緒に住んでいました。

K さんの年齢は私よりおそらく 10 歳ほど上だったと思いますが、近所の中では私と一番近い年頃でした。K さん夫婦が音楽を大好きだという事を知り、よく話をするようになりました。そして何よりも幼稚園に通っていた娘の N ちゃんが私に懐いてくれました。

K さんの一家と私達夫婦は何度か私の家で一緒に食事をするようになり、N ちゃんも一人でも私の所に遊びに来るようになりました。K さん夫妻も N ちゃんも感性豊かな人々で、その交わりはとても楽しい時間となりました。私の夫が出張で不在の夏の夜に N ちゃんと一緒にご飯を食べ、庭で花火をして遊んで、子供の頃に返ったような楽しいひと時を過ごしたこともあります。

K さんはいつもジーンズ姿、丸顔でショートカット、笑顔が優しく大きな目が美しい人でした。後で知ったのですが、K さんはシングルマザーだった母親の元で一人娘として育てられました。どういう事情か、母親とは少女時代から不仲で、K さんは中学を出てすぐに住み込みの家政婦として、ある音楽家の一家の家で家事手伝いとして働き始めました。その後、会社の事務員として働くようになり、結婚して娘が生まれました。知り合った頃は専業主婦で、いつも控えめで謙虚な姿であったと思います。K さんは歌が大好きだという事で、時々娘と二人で讃美歌や、シューベルトの歌曲などを歌いながら歩いているのを見かけました。

K さんの夫は設計士という事で、建築会社や工務店から注文を受けて仕事をしていました。背が高く、物静かで優しくそうな人に見えました。休日にはその家族が娘を真ん中にして手を繋いで楽しそうに笑いながら散歩しているのを見かけ、幸せそうな理想的な一家だと、私の目には写っていました。

兆し

少し経って N ちゃんが私の家のベルを鳴らすことが多くなってきました。私も日常が次第に忙しくなり、自分の仕事や演奏のための練習、レッスンに来る生徒達への配慮から、N ちゃんを毎回家に迎え入れることができずに「今お仕事中なの。ごめんなさいね」と言って帰すことがありました。そのたびに見せた N ちゃんの寂しそうな顔を今でも忘れることができません。

ある時、N ちゃんがアパートの自分の家の玄関を叩き続けていて、「入れて、入れて」と泣いていた事があります。その時は単に幼稚園児の年頃によくある反抗的な行動に対して怒られたのかな、と思っていました。N ちゃんは賢く、敏感なところがある子供でしたの

で、きっと何か大人の気に障るような事を言ったか、または何かしたのかもしれない…と。

ところが気がついていると、そんなことが頻繁に起こるようになったのです。何しろ私の家と K さん一家の住むアパートは、数十メートルの位置にあり、日頃、日中でも静かな住宅地では子供の泣き声は大きく響きます。もしかしたら N ちゃんは家に入れてもらえなくて私の所に来たかったのかもしれない、いや、来ざるをえなかったのかもしれないと気が付きました。

そしてそれは、今から思うとその一家の、特に K さんの辿る厳しい苦難の前触れでした。

私の家に遊びに来ていた N ちゃんを迎えに来る K さんは、「ご迷惑をかけてはだめよ」と N ちゃんを叱る事が多くなり、少しずつ表情が曇るようになりました。単純によその家に遊びに行つて迷惑をかけている、と思つて困っているのかな、と思いましたが、母と子の様子が、そう単純なものではないという事を表していました。また、母親以外の人に懐いていることに対する微妙な感情というのでもなさそうでした。N ちゃんが「帰らない」と言つて駄々をこねることもありました。

ピアノを持たない「ピアノの生徒」

そんな時に、N ちゃんのお父さんが家に来て「娘がピアノを習いたいと言っている、ピアノは家になし、これから先もアパートでは買う事はできないが何とか教えてやってもらえないだろうか」と言ってきました。きっと N ちゃんは私が生徒たちにレッスンをしているところを目にして、自分もその仲間に入りたいと思ったのでしょう。また、幼い心の中で、そうやって何とかしっかりした居場所を持ちたいと思ったのかもしれませんが。

ピアノが家がない子にピアノを教える…学生時代にもそういう兄弟を教えた事があります。その兄弟は、私の実家の近所に住んでいて、とても裕福ながら内部は複雑な事情をもった一家の子供達でした。3 歳と 5 歳、本当に可愛い笑顔の人懐こい無邪気で純真な男の子たちでした。ピアノのレッスンを受けさせたいというのは、音楽に触れさせたいという事と同時に、それを媒介として身内的で親密な存在を求め、家庭の他に子供達に、ほっとできる場所がある事を求めた母親の気持ちによるものでした。ピアノは無いし、男の子だし、どうしたらいいのだろう、という危惧はありましたが、彼らは素直で明るく楽しく、彼らと音楽を真ん中にして接している時間は私の方が心を暖められるという不思議な時間を持った経験がありました。

おそらくは N ちゃんと N ちゃんの両親も、そういった気持ちなのだろうと思つたのと、ピアノは家に無くても、少なくとも音楽の美しさ、素晴らしさを教えられるかもしれない、音楽を通してこの子の魂に触れられるかもしれない、と考えて承諾しました。…そうして N ちゃんは正式に私の生徒となりました。そしてその家族との繋がりも、「生徒

と保護者と先生」という形のあるものになりました。

N ちゃんはそれから K さんの手作りの可愛いレッスンバッグに初歩の教材を入れて、ニコニコして「よろしくお願いします」と言ってやってくるようになりました。そして、すぐ近くに家があるにもかかわらず、K さんはレッスンの終わるころには必ず N ちゃんを迎えに来ていました。そこで N ちゃんのレッスンの様子を聞いたり、K さん自身の話を少しずつするようになって K さんの身の上を知るようになったのです。

異変

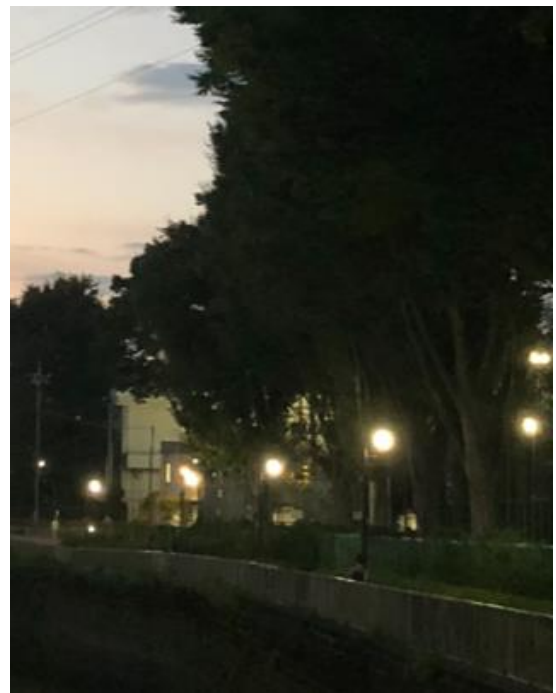
そのうち N ちゃんを迎えに来る K さんが目を腫らしていることがあり、思わず「どうしたのですか？」と聞くと、「夫が別れたいと言っている」と話しました。

その時を皮切りに何度もの会話から、K さんの夫が「夫婦関係をこれ以上続けたくない」、と言っている事、それに対して K さんが「自分が駄目だから」「自分が何もできないから」というように、自分を責めている事を知りました。また、目を涙でいっぱいにしていただけではなく、明らかに顔を腫らしている事がありました。日常生活のちょっとしたすれ違いが大きな裂け目となっていく過程が見て取れました。

夫にも自分にも責められて、K さんは次第に冷静さを失っていきました。N ちゃんもそういう母親に対して反抗的になることもあり、K さんは孤独になっていきました。

アパートの K さんの部屋からは大きな争う声が聞こえるようになり、近所に住む人々はそれとなく耳を聳て、様子を窺うようになりました。そして母子が連れだっているところを見かけると、近所の人々はホッとして優しい声をかけるようになっていきました。そんなに親密ではないご近所付き合いでしたが、どの人も K さん一家の事については気に掛けて、心配する気持ちを持っていたようです。

ある時 K さんがそれまでにないほど、泣きじゃくりながらやって来ました。K さんの夫が突然、娘を連れて出て行ってしまったのです。娘を叱ることや感情をぶつけることがあっても、K さんは娘をかけがえのないものとして愛していました。その大切な娘を「君にはまかせられない」と言って、夫は連れて去って行きました。



Kさんの夫もまた、娘を愛し、悩み、苦しんだのかもしれませんが、Kさんは、突然夫も娘もないアパートの部屋にただ一人、取り残されてしまったのです。

間もなく、深夜に異様な叫び声と何かを打ち付けるような音が聞こえるようになりました。何かが襲ってくるような恐怖感を感じた Kさんが、泣き叫びながらアパートの部屋のドアを釘で打ち付けているのです。窓もという窓も。私の家の二階の窓から、一階の角部屋だった Kさんの部屋の窓が見えます。曇りガラスの窓に Kさんの影が忙しく動いているのが写って見えます。それは異様な光景で、心配で気の毒だと思ふ反面、心の底の底には恐ろしいものを見ているという恐怖の念が起り、そんな自分に対して自己嫌悪に陥ったのを今、自責の念と共に思い出します。

Kさんの心が比較的冷静な昼間に聞いた話は、夫との感覚のずれ、完璧主義の夫に応えられなかった事、常に管理され、ミスを非難されていた事、夫の気に障った時に突然受ける夫からの日常的な暴力の恐怖、等々でした。それは外から見た様子とはかけ離れたもので、若く、人生経験が無かった私には大きな衝撃でした。

夫と娘が去った後、生活の当てが無かった Kさんはパートタイムで働き始めましたが、それまで何年も専業主婦であった Kさんには疲れや不安があった事と思います。そうした全てのストレスが夜になると「誰かが襲って来る」という恐怖に変わって、そうした行動を呼び起こしたのでしょう。

近所に住む人々は Kさんが狂ったのかと息をひそめて成り行きを見ているしかありませんでした。それでも私には少し心を開いてくれていたのは救いでした。

少したって Nちゃんが父親と一緒に私の家にやって来ました。同じ市内の離れた所で暮らし始めたという事、これまで通りピアノのレッスンに来たいという事でした。そして週に一度、父親に連れられて Nちゃんはやって来るようになりました。その帰りに Kさんとも少しずつ会う事が出来るようになったようです。父親もまた苦しんでいる様子が見て取れましたが、少しずつ氷が解けるといいな、と思っていました。

でも結局一旦破綻したものは戻らず、離婚が成立して Nちゃんは父親に引き取られた上、北海道に住む父親の両親の元で育てられることに決まりました。

Kさんは衝撃で、心身ともぼろぼろになって仕事に行くこともできなくなってしまいました。夜の叫び声も大きくなりました。私には何もできず、何の知恵も無く、無力な自分にジレンマを抱えてただ祈るばかりでした。

「先生」

そんな中でしたが、昔住み込みの家政婦をしていた時に、その家の主人が音楽家で、教会や学校で合唱の指導をしていて K さんも讃美歌や、日本歌曲、ドイツ歌曲などを教えてもらった事を聞いたのです。K さんは音楽の素晴らしさを知り、それは K さんの人生でとても幸せだった時だったという事を聞きました。K さんが時々讃美歌を歌っていたのはそういった事があったからでした。

その人の名前は私も知っていました。音楽大学の「音楽教育」専門の教授で、主に合唱などの実技指導をしていた人でした。偶然にも、私の友人がその先生の授業を受けたことがありました。もうかなりの年配の先生でしたが、クリスチャンで人格者としても周囲の人に慕われている人でした。

その話をする時 K さんは涙を流し、「先生と話したい」と言うのです。家政婦をしていたのはかなり前の事ですので連絡先も手元になく、自分の事を覚えていてくれるだろうか、という不安もあると言っていました。それでも一言でも話したい、と言うのです。その教授は私の直接の知り合いではないので迷いましたが、思い切って友人を通してその先生に尋ねた後で、K さんに先生の電話番号を伝えました。K さんの心が少しでも救われると言いと祈りながら。

そして祈りはきかれて K さんは心の中で父親のように思っていたその先生に電話をして再会したのです。

おそらくその先生は K さんに様々な親身で具体的なアドバイスをしてくださったに違いありません。近くの病院の心療内科に通うようになり、診療と処方薬の助けで少しずつ夜の叫びがなくなりました。

K さんは、長年疎遠だった母親に連絡を取って助けを求めました。母親とのわだかまりが溶け、しっかりと心身を治すのだという事で、その街から少し離れたキリスト教系の精神療養施設に入院することになりました。そして間もなくアパートを引払って出て行きました。

N ちゃんもしばらくしてから小学校の入学を機に北海道の祖父母の家に引き取られていましたが、それから何度かかわいい手紙をくれたので、落ち着いた生活を送り始めた様子を知る事ができました。改めてピアノのレッスンも受け始めたようで、音楽の道に進めるかなあ、と書いてきた事もあります。両親と離れて暮らす N ちゃんの心の中はどれほど寂しかった事だろうと察しられて、複雑で、辛い気持ちで手紙を読みました。

K さんの事は道を隔てた向かい側にあるアパートを見るたびに心に痛みを伴って思い出しましたが、私は次第に自分の日常に追われて少しずつその痛みも薄れて行きました。そして長い月日が流れました。

再会

ある日、たまたま家で生徒にレッスンをしていた時に家のベルが鳴りました。レッスンを中断する事に少し苛立ちを覚えながら玄関の扉を開けました。するとそこには髪が真っ白な、いえ、その真っ白な髪のために尚更輝かしく微笑んだ美しい笑顔の女性が立っていました。K さんでした。そして涙を湛えた目で見えて、「退院しました」と言ったのです。最後に会った時から 7 年、いえ、8 年でしょうか。

レッスンをすませて、待っていた K さんと話しました。入院するまでの葛藤、入院からの長期にわたる治療の苦しさ、不調の中で支えになった「先生」から幼い頃に教わった讃美歌と音楽、入院中に得た救い、感謝、そして再生…。現在の自分は全てにおいて神様の恵みを受け、感謝して生きられている、と K さんは言います。そしてある時から、離婚した夫も（再婚していましたが）、夏休みなどに娘を連れて病院に会いに来てくれるようになったと話してくれました。

苦しさでいっぱいだった K さんは消えていました。私の体調まで心配してくれる優しく暖かく感謝に満ちた輝いた人がそこにいました。その時私は奇跡を見た、と思いました。

K さんを思う時、私の心に「気の毒な人」「弱いかわいそうな人」「痛ましい人」という思い上がった心があったのを思い知らされ、K さんは、私が手が届かず、想像もつかない程の、救いと瑞々しい豊かさに満ちた人になっていました。

そしてその日 K さんは、以前心配して見守ってくれたアパートの近所の人々全てを訪ね、感謝の気持ちを伝えて、現在住む療養所の近くの住まいに帰って行きました。

それから折を見て K さんは電話や、手紙をくれるようになりました。娘の N ちゃんと一緒に私のリサイタルに来てくれたこともあります。成長した N ちゃんに会えたことは私にとって嬉しいサプライズでした。N ちゃんはそれからずっと、離れてはいても K さんとしっかりと深い絆を持ち、K さんを支える存在になりました。

これが、私が語りたい物語です。その話をするのが大好きな物語です。

讃美歌を歌っていた K さんの事を、苦しくて涙の中にいた K さんの事を、救いの中で、新しい衣に包まれた喜びに満ちた美しい K さんの笑顔を…

これは私が何度も何度も語りたい聖なる物語なのです。

